

# 天然記念物イタセンパラの保全に向けた取組み

上原一彦（水産研究部）

## 1. 目的

淀川のシンボルフィッシュと呼ばれるイタセンパラは、コイの仲間の淡水魚で、文化庁が天然記念物（文化財保護法）に、環境省は国内希少野生動植物種（種の保存法）に指定している。淀川では主に、ワンドという川に沿って出来た池のような場所に生息する。秋に生きている二枚貝の体内に産卵し、ふ化した仔魚は、貝の中で冬を越し、そして、翌年の春に貝から泳ぎ出す。以前は淀川全域に多数生息していたが、外来魚のブルーギルやブラックバスの影響などにより、平成 17 年以降、その確認が途絶えている。当研究所では、淀川水系の生物多様性の保全と再生の一環として、イタセンパラの生息域外保存を行なうとともに、淀川への野生復帰を行っている。

## 2. 方法

### (3) 生息域外保存

当研究所では、イタセンパラが天然記念物に指定される以前の昭和 46 年から、屋外池を用いて自然繁殖に必要な諸条件の検討を行うとともに、人工授精による繁殖技術開発などを行っている。

### (2) 淀川への野生復帰

国土交通省・淀川河川事務所と共同で、試行的に淀川へのイタセンパラの野生復帰を行っている。

### (3) 市民ネットワークによる野生復帰支援

イタセンパラの野生復帰を支援するため、市民参加型連携ネットワークを立ち上げ、保全活動を展開している。

## 3. 結果および考察

イタセンパラが産卵に利用する二枚貝を調べたところ、イシガイが適することが分かった。屋外に池を造成し、イタセンパラ、イシガイ、トウヨシノボリの 3 種を放養することで、イタセンパラの自然繁殖が可能となった。冬季、貝内のイタセンパラの仔魚が正常に発育するためには、自然環境の温度変化に合わせ、5℃程度の低温が一定期間必要であることがわかった。これは魚類で初めての発見となった。そこで、発育段階に応じて仔魚に適切な温度変化を与えることで、二枚貝を用いずに、人工授精からの増殖に成功した。

これらの技術を用いることで、計画的に淀川に放流する個体を得ることが出来るようになった。そこで、平成 21 年秋に親魚 500 尾を淀川に放流し、野生復帰を試みた。その結果、翌年に 5 年ぶりに淀川でイタセンパラの繁殖が確認された。平成 23 年にも再び 500 尾を放流し、現在、定着に向けた調査研究を進めている。

イタセンパラ野生復帰の取り組みを支援するため、平成 23 年 8 月に市民団体、大学、企業、行政など 20 団体で構成する「淀川水系イタセンパラ保全市民ネットワーク（イタセンネット）」を設立した。今後は、このネットワークを技術面からサポートする予定である。

イタセンパラ、生物多様性